

「ラケット持ったら気分は女学生！ 何もかも忘れて楽しんでいきます」



今回お話を伺った
山田 美枝子さん

今回はご入居されて3年目の山田美枝子様（78歳）にお話を伺いました。

“結納店のお嬢さん”がお嫁入りで “女中さん”に

実家は姫路の結納店で、祖父母・両親・弟二人のほか賄いや畑仕事を頼む使用人達もいる賑やかな家でした。両親は子供ができず、養子をとった矢先に私が生まれたためか、父は特に私に甘く、何でも好きな物を与えてくれました。洋裁学校に通い、調理師免許も取りましたが、両親の言うままの頼りない娘で、そのうち縁談の話がきてお嫁に行くことになりました。

結婚生活は大変、大変。当時お嬢さんをもろうことは女中さんをもろうことと同じで、お義母さんは繕いものをつたまり溜め込んで私を待っていました。炊事・洗濯・掃除・家族の用事は全部私が一人でやり、主人は母親が怖くて守ってくれませんでしたね。

つらくて毎日両親に手紙を書き、耐え切れず一か月で実家へ。主人が迎えに来てくれて戻ったけれど、お義母さ

んには「お嬢さんなんかもうもんじゃないやありませんわ」と言われましたよ。ほどなくお義母さんが中風に。介護がつらくて何度も帰りたいと思ったけれど、放っておくわけにもいかず、結局21年6ヶ月、介護をやりきりました。

入居は「娘の幸せのため」

入居を考え始めたのは一人になってからです。私が病気をして夫婦二人では心細くなり「娘の近くに行きたい」と娘の隣駅に越していたのですが、主人も亡くなって一人になると、今度は「娘には絶対甘えられない」と思うようになりました。

私の行くところを探さなくちゃ、と広告を見ていたら『駅の目の前にホーム』とある。本当にあるのかしら？と娘に言うところ「だったら見に行こうよ」。娘も私を心配していたのでしようね。すぐその日に二人で見学に来ました。

それから片付けや入居準備を始めましたが、もう大変で、子供がありながらどうして行かなあかんの？と思うこともありました。でも「これはあの子の幸せのため。自分のせいであの子の幸せがつぶれたら、生活が変わったらいけない」と乗り越えました。

オテンバ娘に戻ってスマッシュ！

卓球サークルが毎週の楽しみです。

卓球は女学校以来。当時、バレーボールは力が弱くてダメで、悔しくて卓球を始めたら、これはなんとかなった。試合度胸もあって、ここが自分の通用するところと思って相当やりました。交流試合の個人戦では上級生をどんどん負かして、準優勝したんですよ。



男性ご入居者と白熱ラリー！真剣です

ラケットを持つの当時のうきうきした気持ちになります。オテンバでしょう？

卓球は「山田美枝子」ではなく、嫁入り前のお嬢さんの気分、何もかも忘れて、思いきりやらないとだめなんです。いい勝負ができる仲間にも恵まれましたよ。若い頃の下積みは私の方が上だと思えますけどね(笑)

次の楽しみは、秋のデイズニードツアーです。今回が三回目、一回目は50代、人生が気楽になった時。すごく楽しくて、68歳の時「死に土産にもう一度」と主人と二回目。その時は自分が先に死ぬと思いついていたのね。また行けるなんて、ここにきて寿命が延びた気がします。